

西方アジアに於ける考古學的活動 (上)

一九三二年——一九三四年

彌津 正 志

- I メソポタミア
 - 1 スメルの國
 - 2 アツカドの國
- II アツシリヤ
- III イラン
- IV 小アジア
- V シリヤ
- VI フェニシヤ
- VII パレスチナ
- VIII キプルス
- IX 結 び

大戰後、委任統治が行はれるや、シリヤに於てはフランス、パレスチナとイラクではイギリスの考古學的研究が展開され、從來困難なりし地方も容易に探究せられ、敵對してゐた國々に於ても今日では探險が行はれてゐる。考古學者は新たに改良された技術を使つて組織的に研究に着手し、遺跡をすつかり掘出して、遺物許りでなく文化全體を知らうと努めてゐる。この組織的にし

て執拗な努力は、豫期以上の効果をあげ、歴史はその面貌を新たにし、原史時代は思ひがけぬ處から始まることになつた。原史は第四千年と第五千年の間に置かれ、書かれたる歴史の時代は、ヒブロス、ラス・シヤムラ、ウルそしてマリの諸都市から始まることになり、スメル人、セム人、すべての人類は最近十五ヶ年の發掘の結果新しい生命をふきこまれた。

西方アジア(又は近東)における一九三一年以來の考古學的發掘は、近時益々隆盛となり、その報告も亦机上山をなす底の盛況である。人類の文明起源地としての西方アジアの意義・價值はいふまでもなく、著大であるが、不幸にしてわが學界に報ぜられる處、殆ど希である。いまア

ンドレ・パロの「近東に於ける考古學的活動」、コントノ博士の「西方アジアの發掘」、一九三一年乃至一九三三年」^②、同じく「一九三三年乃至一九三四年」をもとにして、西方アジアにおける考古學的活動の概況、ならびにその報告文獻を紹介し、學徒の參考に供したい。

① André Parrot: L'activité archéologique dans le Proche-Orient (Revue des Arts Asiatiques, T. VIII—No. IV, 1934.)

② G. Contenau: Les Fouilles en Asie Occidentale de 1931 à 1933 (Revue archéologique, T. III, 1934.)

③ G. Contenau: Les Fouilles en Asie Occidentale 1933-1934 (Revue archéologique, I-V, 1935.)

一九三二年以前のものについては、茲に詳述をさけるが、それについては左の諸文獻が數へられる。

Report on the excavations in Iraq during the seasons 1929-30, 1930-31 and 1931-32. (イラク國政府文部省考古課、シンダード一九三三年刊)

J. H. Breasted: The Oriental Institute (シカゴ、東洋研究所、一九三三年刊)

I メソポタミア (イラク國)

西方アジアに於ける考古學的活動

1 スメールの國

この國は低地で、エリド、ウル、ラガシ、ラルザ、エレク、シユルバクの諸都市が覇權を争つた國であつた。同時に楔形文字・彫像・金銀細工を以て、「スメル」文明の中心である。一九三三年春には、ラガシとラルザでフランス、エレクでドイツ、ウルで英米探險隊が活動をした。

ウル及びこれに近く存在するエル・オベイド^⑤の發掘で、英米(大英博物館とペンシルヴァニア大學)探險隊は次の事實を明らかにした。すなはち、ウルに於ける第一王朝より古い『諸王の墓』の時代以前に、すでにスメルには一つの長い文化の時代があつた。この時代の土器は黄綠色で、所謂エル・オベイド土器と稱する最も幾何學的な意匠を有するものである、と言はれてゐる。

④ C. L. Woolley: Antiquaries Journal Oct. 1931: p. 343-381, Oct. 1932. p. 355-392; Oct. 1933. p. 359-383. London.

⑤ H. R. Hall & C. L. Woolley: Ur excavations, I Al-Ubaid. Oxford 1927.

最近でもなほウリイ隊長は、右兩地の科學的發掘をつづけてゐる。一九三〇年から三一年にかけて、(一)盜掘されてはゐるがデユンヂの葬禮建造物の發見(前第二十世紀)、この建物は宮殿ではなくて全く住居のプランで造られてゐる。(二)町の南東にあつて、ラルサ期(前第二十一世紀)の一區に、家や店が現れた。(三)前第六世紀のナボンデイ宮の發見を數へることが出来、ウル町のハスメル最大の首府の一であることが判明した。

一九三一年から一九三二年においては、(一)史前墓地とブル・シンの墓との間に、ウル(エル・ムゲル)の第二王朝の墓が發見され、この層において、モヘンヂョ・ダロ型の印章が得られ、かつ諸發見物の様式はこの墓を以て前第二十八世紀頃に屬するものと認めしめる。(二)デキユラの北東に近い所から、第一王朝の石灰石の建物の遺跡が再建されてゐた。この下層には、デエムデット・ナズル期の特徴たる「煉瓦」建物とウルク第四層の殿堂があつた。ウルとウルクの兩發掘におけるこの層の絶對的な一致は注意さるべきである。(三)デカラ頂上の發掘はウ

ルの第三王朝時代頃と考へられてゐた復舊説を變へさせるであらう。エル・オベイドでは、第一王朝時代の建物の基礎下に位する一建物の殘部と、次に第一王朝に先んずる時期の特徴として知られてゐる壁にモザイツクをすゐるために用ひられた多量の陶土圓錐が、新土質調査で明らかになされた。

一九三二年—三三年、主としてデカラの北西及び南東に位する建物の研究が行はれ、就中、デエムデット・ナズル期の墳墓の間で、丁度王の墓地の下において、古代印鑑や獅子・牡牛の横顔の彫つてある石灰器物が出た。普通この器物はもつと新しい時代のもつとされてゐた。

古代のウルク(エレク)であるワルカ^⑥では、發掘は最初ヨルダン博士が指揮したが、今日ではイラク考古局長ネルデケ博士が代り、凡そ三千年頃と謂はれてゐるウルの第一王朝の層位決定を目的としてゐる。表面から下へ次の諸層が明らかとなつた、第一層——非常に破壊してゐるが半平半凸の煉瓦製の建物とモザイツク用の圓錐^{フランコンシエンツク}。第二・三層——薄い粘土層中の伸展葬屍體(この棺中で

焼かれた)の地下墓地。「小煉瓦」、ヂエムデット・ナズル型の印鑑跡ある六十分法のある半圓解的土板。第四層——小煉瓦造りの一神殿遺跡、その壁は「赤い神殿」の名ある彩色石膏で出来てゐる。この外モザイク用圓錐、非常に美しいスタイルの圓筒形の痕跡、六十分法のある圓解的土板。第五層——石灰石を礎石とする一神殿遺址、圓筒形の痕跡一つだけ。第六層——「白い神殿」と稱する一神殿と、これを支へてゐるチカラの遺址。この層から最低のところまでにかけて、十二層より成る重なり合つた建物の跡が見出された。この點○の眞上に、エル・オベイド型の土器が現れ、この點から十メートル五〇のところまで銅器が発見された。第三層の土器はヂエムデット・ナズル型である。ワルカ發掘中の最大興味は、第四期(エル・オベイド)と第五(ヂエムデット・ナズル)との間に、繪のない磨研赤色土器が発見されたことである。この土器は二つの時代を眞二つに區切つてゐる。

⑥ J. Jordan: Erster vorläufiger Bericht über die von der Völkergesellschaft der Deutschen Wissenschaft in Uruk-Warka unternommenen Ausgrabungen. Berlin 1930—

西方アジアに於ける考古學的活動

Zweiter, etc. Berlin 1931—Dritter, etc. Berlin 1932. Dr. Arnold Nöldke. Viertes etc. Berlin 1932.

テロの發掘は元來フランス人の仕事で、一八七七年バスラ駐在佛副領事ド・サルゼツクによつて始められ、一九〇三年クロ大尉がうけつぎ、一九二八年にド・ヂュヌイヤツクが再開し、次で一九三一年からはパロオが指揮してゐる。⑦ 一九三三年春に第二十回發掘を以て完了した。一九三二年には、荒らされてはゐるがグデアの息子ウル・ニンデルスユの時代に遡る壯大な四つの墳墓が發掘された。ウルに於けるデュンゼヤとその繼承者等の巨石記念物を思はせる美しい建物たるこの墓は、二群より成り、且それぞれの群はその端に於て、圓いアーチ形の壁で仕切られ、兩群は二つの壁の間に空地をおいて、背中合せになつてゐる。この空地では葬式が行はれ、多數の供へ物が発見された。最近の發掘中で素晴らしいことは、テロに於て、エル・オベイド型土器包含層を再び見つけたことであり、この土器はメンソボタミヤの全ての遺跡では深さを増すにつれて発見されるものである。時として、當時早くも拋棄された遺跡の地表からも出る。

① A. Parrot: Fouilles de Tello (Campagne 1931-1932): *Revue d'assyriologie*, XXIX (1932), p. 45-57.

同氏 Les Fouilles de Tello et de Senkerah-Larsa (Campagne 1932-33): *ibid.*, XXX 1933, p. 169-182.

一九三三年、ルーヴル博物館の命でパロオはウルクとウル兩地間の舊ラルザ・センケレエの發掘を開始した。センケレエは昔ユーフラト河畔にあつたが、今では河ははるかに遠くなつてゐる。一八三三年英人ロフタスが訪れたが、未だ科學的發掘は行はれなかつた。常に盜掘の憂目にあつてゐた。ラルザは、ウル第三王朝末とハンムラビ支配時代(バビロニヤ第一王朝、前第二十一世紀から第十九世紀)との間の時代に、メソポタミヤに於て歴史の中心であつた處で、地下發掘から出た市場から來た土板は遺跡の古さを示してゐる。第一回の發掘は『太陽宮』の周壁を確め得た、この壁はヌール・アダード王宮の一部を引離したもので、二百以上の土板や破片が發見された。

一九三四年、ウル英米發掘隊は、今日有名なこのウル

で最後の發掘を行つた。この發掘が最後のものとなつた理由は、資金が乏しくなつたのと、隊長ウリイ博士が、數回の發掘による出土物の調査の爲に休息をとらねばならなくなつたからである。就中、出土物の一部を發掘者に提供してゐたイラク政府は、今後これについては非常に不自由な態度をとり始めた。かゝる事情では、ヨーロッパ探險隊は必要な資金を得ることが出来ない。このイラクの態度は、すでにトルコ政府が採つてゐたものであるが、イラクで働く學者の數を減らしてしまつたのである、かくてフランスも一九三四年にはイラクとアナトリアで働くことを中止してしまつた。

一九三四年の發掘の假報告は、次の諸結果を報じてゐる。^②

② C. L. Woolley: *The Excavations at Ur*, 1933-1934.

Antiquaries Journal, Oct. 1934, p. 355-378. London.

(一) アガデ時代(五米乃至七米の深さ)の諸墳墓の時期について。

埋葬は筵、柳籠、粘土棺の中に行はれ、木棺は無く、たゞ一つ圓天井の墓が發見された。多くの墓から白色の

繪を刻んである紅瑪瑙の頸飾が出た、これはインダス文明の同一遺物に接近せるものである。

(二)この層の直ぐ下に、アガデ時代まで活動してゐた『王の墓地』の一部がある。他に一つの固い層が二つの墓地を上下に仕切つてゐる。ウリー氏はこゝで、動物争鬪圖のある貝製の圓筒印章を多く得た。兵士の墓(同一武器が豊富なので)から出た之等の圓筒と同様に、ラリーはこの圓筒が官職を示す徽章の一種ではないかと考へた。

(三)更に下層では、發掘地點に従つて變化する厚い固い層の下に、ヂエムデット・ナズル文明の最後の段階層が来る。それには印章の痕跡のついた粘土や、王の墓地の文字よりも古く、恐らくフアラ文字よりもなほ古い文字を持つた土板がある。之に反して、この文字は多彩土器を有するヂエムデット・ナズル層で見られる文字よりも、ずつと進歩してゐるのである。第三層の厚さは凡そ三米。屍體は横臥屈葬、手は顔の近くにあり、屢々一つの器を持つてゐる。(左右の向きに關せず死者が横臥し

てゐる王の墓地の時代にはこの屈葬状態は知られてゐるが)。屢々屍體は筵の中に伸べられ、又は墓が筵で蔽はれてゐる。この層の上部には、石器(石灰、凍石、閃綠岩、雪花石膏)の存在が支配的で、次に下がると、粘土器がずつと多くなり、これには、裝飾をつける爲に器を液體釉藥の中に浸し、乾かないうちにこの釉藥を拭ひつて、横線又は縦線の圖様にしたがつてつくつた『豫備の不完全品』的な模様がついてゐる。次で黒色またはいぶした灰色の器や、赤鐵礦等の赤い釉藥のついた器、これは時には金屬製磨器で磨かれてゐる。最後に多彩の器が數個出て来る。そこで、こゝには全ヂエムデット・ナズル期を代表する層は問題とならないが、ウル圓筒の第四—五層(ウリーの分類)及びフアラの第二期とに先だつ『小煉瓦』の時代に屬する末期が問題となる。

報告の第二部は調査中に發見された遺物の記述。

最も頻繁にあるものは、無裝飾で、形は限られた同一型の石の器である(故に輸入原料品に加工してゐる)。裝飾を施す場合には、家畜が浮彫され、頭は横向きである

(デムデット・ナズル以後の時代に於けると同様の顔面をしてゐる)。金屬はとくに層の最深下半部にあり、銅の器(平底、形は屢々甚だ大なるものあり)と鋤壁塊ツツカケツルとである。武器や利器は全然ない。

紅瑪瑙の頸飾、貝、碧玉の粒が多数にある、或るものは長い。粘土器(石の器に比していくらか少い)は層の上から下まで存するが、次の意匠をもつてゐる、すなはち、「豫備の不完全品」型、次で輪底で平な肩をした尖つた角度をもち、短い頸には小さい穴がついてをり、表面には赤鐵礦質の赤色が塗つてある器。次に來るものは石の器を模倣した器で、その表面は黒色又は灰色。最後に、艶消し赤色または蔦色を塗つた多彩の器がある、これは粘土の薄黄色をした長方形の豫備品レゼルヴである。この豫備品には黒い幾何學的のものもあり、時として製作者は梅の赤色を用ひた。

ウル(と之に附屬したエル・オベイド)の發掘はメソポタミヤ考古學に重要性を與へた。これによつて、ラガシユの古い王朝時代に先だつ全時期が十五年であつたとい

ふことは疑ひのないことゝなつた。

この發掘によつて現代の考古學者は、ボツタやレイヤールの同時代人が模範を示したと同じ様な復原を行つた。ウルの發掘場に於ける研究は整理と迅速な結果發表とを妨げなかつた。二冊の素晴らしい大報告が現はれ、これは王の墓地發掘の決定報告であり、^④Antiquaries Journalは毎年その概要を載せてゐる。

④ C. L. Woolley: Ur Excavations, Vol. II. The Royal Cemetery. London 1934.

ウルカでは、ハインリヒ博士指揮の下にウルと同じく大事業を始めたドイツ發掘隊は、デムデット・ナズル層⑩でセンセシヨナルな發見を行つた。今日まで圓筒印章とかその痕跡しか出なかつた層に於て、彫刻を元來の場所のまゝで發掘した。これによつて時代の不明な彫刻に對して正確な年代を知ることになつた。主なる發見物は一米ほどの高さの灰色で脚つき漏斗形石製器で、その裝飾は四區に分たれてをり、第一區では女神への獻物、第二區は供物をもつ侍女群、第三區は聖なる家畜、第四區は植物的裝飾で、蘆又は禾本科植物を思はせるや

うな垂直な莖のある植物である。

- ⑩ A. Nöldke ; E. Heinrich ; E. Schott : *Fünfter vorläufiger Bericht über die von der Nogensenschaft der deutschen Wissenschaft in Uruk unternommenen Ausgrabungen* 1934. Berlin.

この器はウルク(第三層)ヂエムデット・ナズル文化の層)から現はれた。その正確な彫刻は注目されるべきもので、ヂエムデット・ナズル層に先行した第四層に於てすで見られた同筒痕や印章痕の技術のすべての特徴が再び発見されたのである。この第三層には、バグダード博物館にも保存されてゐる一つの石碑が発見された。これは玄武岩製で、二人の人物と一匹の獅子との闘ひの繪が刻まれてゐる、一人は槍を持ち、もう一人は矢を放つてゐる。

この石碑には、附近の巨石記念物面に見られる様な多くの特徴が見られ、これによつてそれらの年代を決定することが出来る。長い間、エジプトの原史文明をメソポタミアの同文明に結びつける獅子は承認せられてをり、その時期も豫想されてはるが、今やはつきりとウルクとヂエムデット・ナズル時代を之に接觸する時期として認

めることが出来た。

- ⑪ G. Bénéite : *Le Couteau de Gebel-el-Arak* ; *Mouvements* Piot XXII.
G. Contenu : *La Chronologie en Asie Occidentale ancienne et le couteau de Gebel-el-Arak* (*Revue d'assyriologie* 1932. p. 31-38)

ウルカの發掘方法は他の手本となつた。各所でこの流儀が採用された。

二年間で終つたテロの發掘はド・ヂュヌイヤツクの三回(一九二八—二九、一九二九—三〇、一九三〇—三二)の發掘報告の出版で明らかになつた。一八七七年以來、最初のスメル遺跡として公然隱然と發掘されてゐたテロは、之等の先行研究の價値を定めた。

- ⑫ H. de Genouillac : *Fouilles de Tello I. Epoque pré-argonique*. Paris. 1934.

最初の發掘當時は、いまだ現在の層位學的方法が知られてをらず、發掘品の状態に對する探險隊の配慮は、今日でも尊敬に値するものであつた。ド・ヂュヌイヤツクの大功績は、擾亂され、博物館の爲に主なる遺物を奪ひ去られた地中に於いて、他のメソポタミアの遺跡が今日

吾人に示した文明の論理的繼續を再発見したことであつた。彼の發掘は遺跡の層位を復原し、今日までテロでは知られなかつた時期を定め、從來発見された遺物に對して更に精確な年代決定を行つた。オベイドとウルクのかくも特徴ある時期はテロに於て豊富に代表され、かつ處々に地表に分散してゐる彩色土器を考へに入れなかつた從來の誤謬が補正された。

デムデット・ナズルの多彩土器は他のメソポタミヤの多くの遺跡におけると同様にテロでは極く希である。

2 アツカドの國

Ch.ワトリンはキツシユ^⑩(今日ではバビロニア近くのエル・オヘイミール)の發掘を指揮してゐる、この事業はオックスフォード大學とシカゴのフィールド博物館が催した。この發掘は最も古い層中(未開地上三米の高さ)に水が浸入したので妨げられたが、先史時代に關する顯著な結果がデムデット・ナズル(キツシユに隣れる遺跡)で得られた。『諸王の墓』とウル第一王朝の時期に先行した時期に、美しい形式の痕跡をもつた繪文字を半ば彫つ

た土板を特徴とする層と、時には無彩土器、時には多彩の厚い裝飾をした土器とが発見された。この土器は多くの遺跡でも発見され、エル・オベイド期につゞく所謂ウルク期の眞上に當る一つの時期を定めた。メソポタミヤの歴史時代に先行したこの文化の三時期の分類は近年に於ける考古學の最も著しき收穫の一であつた。この重要さは之等の時期と、エラムで認められた時期との間に設定された關係を事實上増加した、こゝからして、更に正確な比較年代學が可能となつた。

^⑩ Report on the Excavations in Iraq during the Seasons 1929-30, 1930-31, and 1931-32. p. 12 et suiv.

一九三〇年—三一年にはじまるシカゴ東洋研究所のイラク探險隊は、H・フランクフォルトを指導者とし、之にデルーガとCブロイセルとが加つて、バグダードの北東なるテル・アズマール(昔のエシユヌナ)と、バグダードの東でデヤラ河畔のハワアジエの兩遺跡の發掘を行つた。^⑪

^⑪ E. Mackay: Report on Excavations at Jander-Nasr, Iraq, Chicago 1931.

テル・アズマールでは、王宮である筈の建物の連続的な再建築のおかげで、ウル第三王朝末から、この土地の運命を支配した諸王朝のリストを作ることが出来た。當時エラムの祖先の一王朝はエシヌメンナに在り、バビロニヤ第一王朝が之に取つて代つた。發掘中、ウルの神とされた王ヂミル・シンに獻けた大神殿の遺址を蔽つてゐる建物の一部が發見された。宮の西部に當つて、さして重要ならざる一神殿が現はれた、神殿の入口がその中庭の中心にあるのに、宮殿の入口はその横手にある。アガデ王朝末期に當てらるべき廢墟の中から、探隊隊は象・犀・鰐(すべてモヘンジョ・ダロの印章と全く同一型)の飾をつけた一圓筒を得た。これこそインドの遺跡の年代を決すべき重要な發見であつた。

ハファヂエでは、エシヌメンナの二三の地點におけると同様に、地表の遺址が問題となつた。一行は、防壁を持ち、卵形をして、一定の出張り所のある建物の跡を發見した、この建物は古代スメル時代まで遡る。そこにはテラスが残つてゐる、このテラスを圍む麥打場の周縁は

小さい室や倉である。

こゝで非常に珍らしい銅製の小人物像が發見された。それは白足の臺の上に立つ裸の一寵愛品であつた。この人物の頭の上には、ボタンとしか考へられない物がついてゐる。ウルの『軍旗』に描かれた諸場面中に彫つた一金屬板がハファヂエからも現はれた。この繪によると、一人の主長と彼の妻が坐し、音楽の調べを樂んでゐる。その眞下には、重い水甕を捧げる召使と一人の牧人と荷人足が居る。第三の場合には、主長が自由にしてゐる馬をつけた馬車がある。ウリイ博士はウルで金屬板の一片^⑩を發見した、これは前者の復本であつて、馬車の場面の一部を描いたものであつた。

⑩ Antiquaries Journal. 1928 Jan. pl. V. I.

ハファヂエで、フランクフォルト博士一行は次の事實を認めた。前回到發見された卵形の城壁をもつ神殿は、家でかこまれてゐる。一行は、古い時代の遺物を得たが、その中には、陶土製の香盃(二つの器に支へられてゐる)や、小輪の上につてゐる全一組がある。香盃を支へて

るる臺は、二つの器がこれを支へてゐるのだが、家に似た立方形をしてをり、多くの口がついてゐる。陶土製の小鳥が屋根の梁の端のある壁の高さの所に貼りつけられてゐる。この崇拜の對象物は古代スメル時代のもので、同じく曲つた口がついてゐる銅製の美しい灌漑器である。之等の容器は古代の遺物をまねた形をしてゐる。探險隊は、同時代には、動物や人物が雜然と彫つてある凍石製の器片、家の戸口の描寫を意味するモチフより或る一つの礎石の上に、同時代の凍石製器の上に、一つの見本を別に發見した。

⑩ H. Frankfort: Iraq Excavations of the Oriental Institute, 1932-1933, Third preliminary report of the Iraq Expedition (The Oriental Institute of the University of Chicago, Communication No. 17) Chicago 1934. Illustrated London News, 9 June 1934, p. 919-913. et 919.

フランクフォルト氏が新年の祭りを表したものと思つてゐる石の板は三區に限られ、そこには坐飲せる人物、大きい杯盤をさぐぐる侍者、仔山羊一匹、多くの器物、下部には一人の音楽家と歌手(?)がある。この板のスタ

イルは、その右の内角が缺けてゐるが、馬車の繪のあるウル發見の古代板に關係あるものである。この板は中央に四角な穴がある。さらに小さい遺物の出來は優れてゐる。色々な色の石のなかに刻まれた臥した動物を描いた印章、曲りくねつた蛇の浮彫がついてゐる器片、この蛇の胴體は赤と黄色の象眼で飾つてある、鹹水産貝の殻軸の中に彫つた、全速力で走れる小さい獅子、之等はルーヴルや大英博物館に蒐集されてゐるものと同じものである。

非常に興味ある小像が發見されて、その或ものは月の神に獻けた文章を記してゐる。そして同時代に存在した多くの衣服の型を保つてゐる。

この發見の興味はさらにテル・アズマールに於ける發掘によつて高潮に達した、ここではフランクフォルトが前數回の發掘で拭ひ去られた場所から、アカデ王宮と神殿を發見した。凸面型の煉瓦で出來てゐる壁の中から、銅製武器・利器、笛、濾器、ウル諸王の墓出土のものと同じランプ、短劍(このなかに鐵刃を受けてゐる赤

銅筒がある)を藏めた隠匿所があつた。この事實は、凡そ前二千六百年の當時として、全く思ひがけないことであつた。ウル、の王墓地の時代のものと證明されたこの透し彫の劔の筒は、リュリスタンの青銅器中からも屢々發見されてゐる。テル・アズマールの印章の中に、透きとほつた白いガラス同筒が一つあつた、フランクフォルトは、之をグチの時代、恐らくアガデの時代と定めた。

⑭ H. Frankfort: Iraq Expedition, Third preliminary report, etc.—Illustrated London News, 19 May 1934 p. 761, 774-778 et 802.

すでに前回にアッブ神の殿堂と認められた神殿の發掘中、フランクフォルトは、アカデ時代と認めた鋪道の下に、ウル、の王墓時代の青銅器を發見し、すぐその下には神々が侍者たちの多くの像を収めてゐる原始的な一神殿を發見した。

之等の小像は〇・三〇米から〇・七五米までの大きさで、精巧に出來てゐる。うち二つは植物の神アツブとそのバレードルを像つてゐる。人物には髪とひげがついてゐる。フランクフォルトが神々と思つた人物は法外に大

きい。之等の像は王の墓地時代に先行し、デムエデット・ナズル時代よりも新しい。然しサルゴン先期末のものよりも藝術的に秀れてゐる。サルゴン先期中の最も古い彫像には、人體を幾何學的な形で描く傾向があり、眞の「立體派繪畫」的傾向がある。この方法は次いで(すでにテル・アズルにて、然しとくにハファヂエにて)もつと自然主義的な扱ひに代はられる。層位の關係や、遺物の調査によつて、之等の彫像を研究したフランクフォルトは、これを前二千七百年頃から二千七百五十年頃のものとした(けだし舊サルゴンは二千五百五十年頃であるから)。この時期を餘り新しすぎると考へて、サルゴンを二千七百五十年頃と見なす人々は、この彫像を二千九百五十年頃と考へてゐるらしい。重要なのは二百年の計算である、この期間の差違がこの彫像をアガデ王朝のものと同區別してゐるのである。パロオはアガデ又はアガド王朝創始者サルゴンを前二千七百五十年と見てゐる。

⑮ Revue d'assyriologie, XXXI 1934, p. 173-179.

II アツシリヤ

⑩ ニネヴェエで、大英博物館のキャンベル・トンブソン博士がアツスルナシルバル宮(一九二七年—二八年發見、一九三二年まで三回發掘)と、一九三〇年にその角^{カド}が發見されたイシユタル神殿の研究を行った。一行は七寶燒煉瓦や多くの碑名と彩繪土器の興味ある標本を得た。メソポミア南部に於けると同じく此處においても、同段階ではないとしても少くとも文明の進歩に於て一致する諸段階が見出され得ることを證明した。發見土器中には切込裝飾のある土器破片が別に一群をなしてゐる。

⑪ R. Campbell-Thompson, 'The British Museum Excavations at Nineveh 1931-32 (Annals of Archaeology and Anthropology, Liverpool XXX (1933), p. 71-186.

深さ九十呎の井戸の水面より少し上の處女層から上へかけて、次の先史時代の五層が認められる。第一層、切口あり結びついた大型土器。第二層、杏子色又はクリーム色の素地の上に光澤ある黒又は赤色の幾何學的圖様を描いた土器、これは石器と黒耀石器を伴出する。第三

層、手捏ねで磨研土器、銅器、美しいスタイルの動物繪ある印章。第四層、ウルクにて出土したものと同じ赤色釉藥の土器、轆轤の出現。第五層、明色地に黒色と赤色にて描ける動物繪ある土器。トンブソンによれば、この層はウル^{ウルク}の『諸王墓』の時期に一致する。

第五層の土器は全くモースルの北東にあるテル・ピラ^{テラピラ}のものに比較出来る様だ。フィラデルフィヤ博物館とアメリカ東洋研究學院主催下に、スペイザーが一九三〇年指揮した該發掘は、七つの新層を決定した。第七層—轆轤製又は手捏ね土器、これには幾何學的模様があり、單色の小鳥の繪帶^{インクベ}がついてゐる。第六層—灰色の勝つてゐる土器、杯が多い。模様は屢々切込まれてゐる。第五層—銅器、杯、鍋、切込ある大きい壺。第四層—同じ模様のある鉢と長い壺、そして屢々幾何學的模様が描かれてゐる。第三層—杯、器の素地の上に際立つた色の圓形帶の上に應用された動物紋と幾何學的模様ある水盤(修繕されてゐる)。第二層と第一層—無裝飾の大型土器。スペイザーによれば、之等の層は次のものと一

致する、すなはち、第七・六層はデムデット・ナズル（三千二百年から二千九百年）、多彩土器はテル・ビラには無いが（この時期はデムデット・ナズル期末に比して餘り新しすぎる様だ）。第五層は二千九百年から二千七百年。第四層はアナトリアの土器に比して、凡そ千九百年頃。第三層はユリ時期（千六百年から千四百年）、第二層と第一層はアッシリアの千三百年から七百年にいたる時期。この發掘は一九三二年までつゞき、その後は、ツシが一九三三年に行つた。

ニネヴェとテル・ビラに於ける土器發見は興味がある、南部の土器との一致が定められるならば、特にこの一致は年代學的であり、標本と技術の一致をもたらす處が少い。これに反して、この土器を他のものに接近させる必要があれば、それはベルシャの北部（例へば、テベ・ヒツサール）である。もう一つの結果はこの土器とユリの土器をひきはなすことである、ハーヴァード博物館とアメリカ東洋研究學院の委嘱でチーラとスター兩氏によつてすでにケルクク近くのヌジで得られたものだ。この土

器はユリが占領した場所に共通の表現を與へてゐる、（ピラにおけるこの紋の香爐はハイザンの同じ物と接近すべきである）、そして寶石彫刻術によつて明證が與へられる。

②⑥ E. A. Speiser, The Pottery of Tell Billa; *Museum Journal* (Philadelphia) Vol. XXIII, No. 3 (1933), p. 249-283.

②⑦ *Archaeology and the Sumerian Problem*. Chicago 1932.

②⑧ Tell Billa. Pl. LXIII.

②⑨ Alan Rowe: *Museum Journal*, XVII, p. 297.

コルサバードの發掘は、ボツタ（一八四二年）とフランス兩佛人が残つて行つてゐるが、アッシリヤで注意すべきものである。イラクからシカゴ東洋研究所に譲られた、フランクフォルト博士の數回の發掘は、最初の發掘者が記録したがそのまゝにしておいた遺跡の遺物や、サルゴン王二世の王座の腰石の如き未知のものまで發見した。ナブ神殿内の最も重要な發見の一つは、アッシリヤ諸王の治世期間を書いた表である、これは第三の千年から前第八世紀に及んでゐる。

テベ・ガルラの發掘は一九三三年から三四年にかけて

行はれ、テル・ビラの結果を完全なものにした。テペ・ガウラは^{②①}チゲリス河の東で、バグダードの北東に位し、一神殿が発見された。これは一九二七年以來ファイラデルフィア大學博物館とアメリカバグダード考古學々院との共同調査中における、第九層に屬する。第八層の聖殿下にあるこの神殿は第十層にあるも一つ古い一つの建物に蔽れてをり、入口に向ひ合つた一室のまん中には叩き固められた土爐がある。然るに第九層の神殿は乾かして鑄造した煉瓦から出来てをり、第十層の建物では、壁などは粘土(建設中に仕切を作る)をたゞ積重ねたものである。第九・十の兩層では(第八層と同じ文化に屬する)、手捏ね又は、轆轤製の無紋土器を一ケ得た。金屬は少い、とくに燧石と黒耀石の石器が出た。第九層からは明らかに^{すばり}迫持の材料だつた鐵片一ケを得た。この層では、多くの煉瓦製の墳墓が現はれた。遺骨は常に横臥屈葬であり、時には一墓に二體も膝と膝を向き合せて存してゐる。屍體は筵の上に伸べられてゐるのである。このうちの或墓からは、野牛と鬪つてゐるエンキチュを描いた小

骨板が出た。

^{②①} B. A. S. O. R. 1934. No. 54. p. 13.

テペ・ガウラの南東數キロの地點にあるテル・ビラ^{②②}では、ファイラデルフィア大學博物館とアメリカバグダード考古學々院の共同調査は第三回(一九三三)發掘を行つた。上部諸層はベルシャ時期、とくにアツシリヤの時期に屬する(ビラ第一期は前第九世紀のアツシリヤ王サルマナザール三世に獻けられた建物に一致し、ビラ第二期は前第八世紀に相當する)。シツバーニーバの名を冠する多くの文獻がアツシリヤ時代の遺跡から現れた。

^{②②} B. A. S. O. R. 1934. No. 54. A. J. A. 1934. p. 286.

× × ×

ニネヴエでは、前述の第一層から第五層までの諸層はメツボタミヤで發見された事實に全く一致しないのである。けれど、ニネヴエ第五層はスーザ第二期と多彩テペ・ムツシアンと同時代であり、かつ年代は第三の千年の前半期に當る。そしてニネヴエ第五層を以て彩色土器は終るのである。

ニネヴエ第四層では、ヂエムデット・ナズル期の土器

と最初の文字があつたが、ウルク第五期からウル諸王の墓初期までの時代に當る。

彩色土器が減少し、灰色土器や他の革色土器、金屬と印章が現はれるニネヴェ第三層はオベイドの諸層、ウルク第五層に相當する。

故に、この一致の現象はニネヴェとアツシリヤ間の他の遺跡に對する程嚴密ではない。しかしニネヴェ第二層はサマラ、サクヂエ・ヂユズイ、テル・ハラーフの土器には類似してゐるといふ特徴ある結果を有し、同時にニネヴェ第一層はかの黒色で切込ある複合土器、赤色や黒色の彩繪土器、燧石の存在と一致する。この發掘は、他の壕においても行はれた。ただし、十五壕のうち二十米の一つの壕から最初の諸結果が得られたのであつて、その面積は深くなる程少くなつてゐる。ニネヴェに對して、すでに他の遺跡で證明すみの南部と北部との差異を認める廣い表面をとつて掘ることは、非常に興味あることであつた。

恐らく、何がニネヴェ上層と一致するかといふことを

これ程明確にすることはあるまい。ただし、モースルから程近いアルバシヤの發掘はマロワン氏が指揮したが、著しい同時代性を立證した。マロワンはこゝで、十ケの新しい層を發見した。第七層では、直徑約六米の圓い建物、その廊下につゞく壁の厚さは一米。礎は石で作られる(恐らくクリート島の墓に比較出来る)。最初の新しい四層はウルとキツシユでの深層出土の土器を有し、第六層では、灰燼に歸した都市廢墟がある。この下にサマラとテル・ハラーフの土器に比較出来る土器があり、その古いものはオベイドのものと比較出来る。黒繪の灰色土器や、黒繪の杏子色土器と並んで、星とか薔薇飾りでかざられた中央をくまどる様に飾られた皿がある。皿の縁飾は壁の煉瓦をまねて小さく重り合つたとか、生地が薄ければ黒色の十字、生地が濃ければ白色の十字とかで出来てゐる。時として薔薇飾りは、赤色の如きフレツシユ色で黒地の上に浮上つてゐる。故にこの土器は非常に個人的工場を代表してゐるが、テル・ハラーフのものに比較し得べき黒裝飾の灰褐色土器はテベ・ヂヤンやライや

カシヤンの革色土器に比較することが出来る様に思はれる、カシヤンではこの土器はオベイド型土器の下から現はれる。アツシリヤの原始土器とイラン高原のそれとの關係は、故に、アツシリヤとスメル・アツカド國間の關係以上に近いものである。

⑳ Illustrated London News, 16 Sept. 1933, p. 436.

一九三三年フロレンスのフルラニ氏が指揮して行はれたカクス(カズル・シエマモク)の伊太利人の發掘は、エルビルから二八軒の大ザブの東で廢墟の丘を發見した。遺跡認定の最初の仕事は丘の各所に行はれ、北西と西部の第一層はバルテア時代を現し、この時代の無数の小遺物を提供した。南部ではセナシエリブがたてた町の壁と、アツシリヤ建築の廢墟に行當つた。發掘遺物の中、ツクルチ・アピンシヤラの息子アツシユル・ダーン二世の名(前第十世紀)を冠した陶土の筒がある。

㉑ G. Furlani; Gli Scavi italiani in Assiria (Campagna del 1933): Giornale della Societa Asiatica Italiana, N. S. II, 1934, p. 265-277.

遺物豊富なコルサバードで、フランクフォルト博士は門の浮彫即ち(ルーヴル博物館にあると同じ翼ある野牛

と化物)の發掘を續行した。ナブ神殿の露出も行はれ、神殿の内壁はマツシユ(彫像などを置く壁の凹所)と、未完成の圓柱で飾られ、圓柱的石膏で蔽はれた生煉瓦で出来てゐる。大きい石をよく對に並べた一種の棧橋は、宮殿のテラスによつて神殿に連結してゐる。

小遺物のうち石垣を思はせるバラワットの諸門の打出しに彫つた青銅板片や、エヂプトの影響が認められるアルスラン、タツシユやサマリヤのものに似てゐる壞れた象牙が著しいものである。

㉒ Illustrated London News, 14 July, 1934.

一九二七年五月、スベイザ博士はデユルワン村近く(ニネヴェの北東五十裡)で一種の土手を認めた、その石塊にはセナチエリブ^㉓の名が冠してある。シカゴ東洋研究所のジャコブゼン博士は一九三三年に一つの記念物を認めた。

フランクフォルト博士の研究の結果は、北東五十軒の地點にゴメル川はその通路の隙間を補ふための一運河と並んでをり、この運河の通路(幅二十米)は、發掘の結果、大きさ三米の石の胸壁でたゞみ備へられたことが判明し

た。運河の入口には、建設者セナチエリブがその防禦神として化物と人頭野牛を表はした浮彫を彫り、岩の内壁上には、供物の動物に跨つた一對の神の後に大きい石碑がある。碑文は王をほめたゝへ、運河建設の委細に関する記事をかゝけてゐる。

⑩ B. A. S. O. R. 1927. No. 28. p. 16.

⑪ Illustrated London News. 5 Aug. 1933. p. 226.

⑫ Ibid. 25 Aug. 1934. p. 294-296.